

開催日時	2006年6月3日（土）12:30～14:15
場 所	大阪ビジネスパーク 円形ホール
参加者数	委員 13名 河川管理者 36名

1. 決定事項

- 平成17年度事業の進捗点検への意見書案の作成担当が次のように決定した。
計画：寺田委員、岡田委員、川上委員 環境：村上哲委員（村上興委員補佐） 治水：水山委員
利水：荻野委員 維持：水山委員
- 次回の部会検討会（6/17）に素案を提案するので、庶務まで意見提出をお願いしたい。

2. 検討の概要

① 河川管理者からの説明と質疑応答

河川管理者より、資料2-2「河川整備計画進捗状況報告項目」を用いて説明がなされた。

② 平成17年度事業の進捗点検についての意見書に関する意見交換

資料3-2「河川整備計画基礎案整備シートに係る平成17年度事業の進捗点検についての意見書（案）」を用いて、意見交換がなされた。主な意見は以下の通り（例示）。

○ 環境-3-10 縦断方向の河川形状の修復の実施

- 魚道を改善していくのはよいが、予算等を考慮して、ある程度のところで折り合いを付けていくべきだろう。
←河川施設によって魚類の遡上がどの程度阻害されているのかがよく分からない。データがあった上で、下流から整備をしていくというような全体計画が必要だ。
- ←まずは淀川大堰の魚道から整備し、その後、木津川上流の発電所の堰等の整備に移るということになっていた。データについてはこれまで配付された資料にも出ていたように記憶している（部会長）。
- ←堰と魚の遡上については細かいデータがあり、木津川の河川環境委員会で検討している（河川管理者）。
- アユ以外の魚種についてもモニタリングできないか。
- 農業用水の頭首工は、現実的には改善できない。魚道施設だけをいくら作っても周辺地域の人々に分かってもらわないと機能しない。堰の構造や取水量・放流量まで河川管理者が把握することによって対応できることがあるのではないか。小さな井堰の統合や慣行水利権から許可水利権への切替も含めて進めて欲しい。
- 資料2-1 P4で魚道の○×評価が示されているが、評価の基準について教えて欲しい。

○ 環境-9-1 琵琶湖・淀川流域水質管理協議会（案）の検討

- 評価してよい。大口の点源対策がまず先だが、生活排水等の面源対策もしないといけない。意見書では、後者についてより具体的な意見を述べたい。
- 河川水質予測モデルの具体的なイメージは？
←ある地域の汚染が河川の水質にどの程度の影響を与えているのかが把握できるようなモデルをイメージしている（河川管理者）。
- ←下水道で拾えるようなものは点源だ。この流域は点源で対応できるところがまだできていない。一方で、面源が相当に残っているとも考えている。これまで誰も手を付けて部分に資金を投入していないといけなないので、どれくらいやればどのくらいよくなるのかを示さないと誰もやってくれない。きちんとやっていないといけないと考えている（河川管理者）。
- 自動車のNOx対策の手法が参考になる。車ごとの単体規制の後、総量規制に移行した。地域ごとに達成目標を作り、その達成のために必要な配分をしている。他分野の成功例を参考にしてもらいたい。
- 市民への普及啓発活動と連動させていく必要もある。
- 河川水質予測モデルでは、BOD、N、P等を指標として用いていくのか。
←資料を提供したい。今後、自治体等の協力を得てすすめていきたい（河川管理者）。

○ 環境-12-4 既設副ダムの継続活用

- 窒素に関するデータがあれば教えて欲しい。リンが減ったからといって、プランクトン発生が抑制されるとは言えないだろう。プランクトンの発生が抑えられているというデータがあればお願いしたい。それから、シルトの下流への流出範囲についてはどうか。

←クロロフィル a と栄養塩についても把握しているが、シルトの下流への流出については、データをとっていない（河川管理者）。

・「水とふれあうレクリエーション空間を創る」という点について意見を述べておくべきだ。

・今後は、他のダムでも副ダムを造っていくのか。

←ケースバイケースだ。ご意見を頂きたい（河川管理者）。

○ 環境-17-5 オオサンショウウオの生育環境を保全する

・捕食量ではなく、オオサンショウウオの体重に対してどれくらい食べたのかという「摂食量」が重要だ。「摂食量」と「捕食量」は違う。摂食量のデータを示してもらう必要がある。体重については、時間が経てば成長しているので、体重が増えるのは当然だ。生息条件の善し悪しによる体重変化を示すなら、標準の体重との比較が必要だ。

←さらに具体的に検討していきたい。保全対策としては、影響のある 125 体の移転対策がメインと考えている。今後は、移転試験地での繁殖に関するデータ等の収集を考えている（河川管理者）。

○ 治水-5-1 上野遊水地事業

・資料 2-2 P19 の上野遊水地の検討フローを見る限り、これまでのやり方を改良しようという意志が感じられない。そもそも、どこかが悪いのかがわかっていない。遊水地計画の検討が杜撰だ。HWL で氾濫する面積だけで比較検討している。水理学的な計算をすべきだが非常に難しいので、模型実験をするほかない。越流係数の検討だけではレベルが低い。とにかく、遊水地の模型実験が必要だ。その模型実験の基本になるのが岩倉峡HQ。川上ダムを実施するのであれば、ダムの規模の根拠が必要になってくる。過去に遊水地の模型実験をしたことがある。実験によって、計算がいかに杜撰なのかがよくわかった。模型実験をすれば、計算結果と実験結果がいかに違っているかがよく分かると思う。

・そもそも、河川管理者と流域委員会の認識が違っているのだろう。

←確かに河川管理者の判断があるとは思いますが、流域委員会としては、この程度の検討では駄目だ。想定した洪水がきたときに、遊水地で波形がどう変わるのかを示して欲しい。氾濫しないと仮定した場合の計算も示して欲しいが、これだけ大規模な計画であれば、やはり、三次元模型実験が必要だ。

○ 維持管理-3-1 樹木の伐採と管理

・治水上の障害になる樹木を伐採する。その場合に環境の問題を考慮してどこから伐採していくか、伐採基準と伐採順序のモデルが必要だ。住民への説明の際にも必要になってくる。

以上

※結果報告は、委員の皆様に必要な決定事項等の会議結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させていただくものです。